

日本デザイン協会 デザイン座談会 2

「デザインにできること、デザインの可能性」(抄録)

開催日時：平成20年2月15日(金)午後6時30分～8時30分

開催場所：文化女子大学 17F A-172 渋谷区代々木3-22-1

パネラー：木村麻衣子(アクタス)平成16年度・インテリアデザインコース卒業

戸高真理子(イトーキ)平成17年度・大学院 住環境学専攻修了

須藤 絵理(ケユカ)平成18年度・インテリアデザインコース卒業

コメンテーター：大倉富美雄(JDA)建築デザイン

秋山 修治(JDA)インテリアデザイン

宮沢 功(JDA)環境デザイン

コーディネーター：木村戦太郎(JDA)プロダクトデザイン・文化女子大学

文化女子大学・木村ゼミ生の卒業制作のテーマに「スモールスペースの活用、家族間コミュニケーションへの家具の提案」を取り上げる学生が多いが、これは今日的テーマでもある。

そこで、これに該当する作品を提案・制作した卒業生3人を招き、デザイン意図・制作プロセス・感想などを聞いた。

木村と須藤の作品は、ワンルームマンションでの多様な生活シーンに対応する家具の提案で、狭さに対処する為に、甲板に伸縮機能を持たせたり、ユニットを組換えたりして多様な使い方を可能としたもので、大きく使って小さく仕舞う家具である。

戸高の作品は子育て核家族をターゲットとし、資料や実態調査をベースに、ダイニングが家族交流のマグネットスペースだと設定した。そして、ダイニングで行われる食事以外の行為(宿題・新聞閲覧・PC操作・調理配膳など)にも対応可能な可動変形式のテーブルを提案した。

コメンテーターからは、盛り込まれた多機能が本当に便利だろうか?という疑問も投げかけられ、さらに「作ること」に追われて、コンセプトの詰めが甘いのでは、との指摘もあった。これを受けて卒業生達は、夫々に社会人としての経験を経た今、改めて自分の提案の至らなかつた部分にも気付いた様だった。

これらは私にとっても耳の痛い指摘であり、今後の指導で再考すべき点を気付かされた。しかし、デザイン教育という視点からは、通常行われている、図面・モデル等による智的アプローチを超えて、現寸で考え・素材と格闘して作り上げ、現物でその提案を評価する取組みには意味が有る。問題は、締め切り間際に作品が完成し、確りと事後評価が出来ていない点にある。数年後に彼女達の使用感を聞きたい、これが当夜の結論だった。今回のデザイン座談会は、テーマからずれた議論も展開した。企画者として面白くもあり、反省もあった。(文責/木村戦太郎)

なお、当日の詳細記録については本部事務局へお問い合わせください



木村麻衣子「一人暮らしの為のリビングテーブル」一人暮らしの生活での、食・学・遊・休の行為を分析し、夫々に対応する伸縮式テーブルを提案。



戸高真理子「可動変形式ダイニングテーブルの提案」テーブル甲板の1/4を分割し、引出し・キャスターを付けて、様々な生活行動に対応する。



須藤絵理「酔いたくなる多機能家具」一人暮らしの生活を楽しむ為のユニット家具。椅子座・床座に対応し、照明も付いて宴席を盛上げる。